

2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	リテラシーの向上を目的とした多読教育の実践研究 －内発的動機付けを支援する読書活動とその効果－
キーワード	①日本語教育、②読書活動、③アクティブ・ラーニング

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	イワサキ チエ 岩崎 千恵	所属等	長崎短期大学 地域共生学科 講師
プロフィール	九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻にて修士学位（比較社会文化）を取得後、同大学院博士課程後期課程を単位取得満期退学。大韓民国の私立学校法人弘益大学校教養科日本語専任講師を経て、長崎短期大学国際コミュニケーション学科に講師として着任。（現在は地域共生学科国際コミュニケーションコース・准教授）自身の留学経験から、受け入れ国の言語社会環境や言語教育、地域社会の在り方に関心を持ち、教育社会的な視点から多文化共生を目指した研究活動を行っています。また、福岡教育大学では非常勤講師として、読書活動による言語・心の教育実践を通して教員養成などに関わってきました。人間社会における言語がもつ社会的意義や価値を信じているからこそ、言語教育と共生社会の在り方に関して今後も研究を進めていきたいと思えます。		

1. 研究の概要

本研究は、日本語多読の実践が留学生の日本語リテラシー向上の下地となる主体的・能動的な学びを心理面から支援し、その効果があるという仮定を「日本語多読」と、その中で行われる様々な読書活動、サービ斯拉ーニングと連携した授業実践を通して検証したものである。

本来、日本語リテラシーとは、文字通り読み書き能力のことを示すが、本研究ではより広義の「読みとった内容から必要な意味をつかみ取り、理解した上で、その理解を行動としてアウトプットする」能力と規定した。

研究対象は1年生の日本語多読受講生とし、約1年間の作品成果物と質問紙調査、質的調査から仮定の検証を行った。これらの調査からは、日本語で書かれた書籍そのものに対する拒否感が薄れたことや、長文に慣れていった様子、コメントカード作成等の読書活動がもつ文字によるコミュニケーションに対する達成感などが、より一層、個々の読書活動に向かわせたことが分かった。

このことから、様々な読書活動が学習者に対して言語活動に関する成功体験の積み重ねとなり、読書への動機付けへとつながったことが明らかになった。また付随的により高いレベルの日本語学習に対する気づきを高めることが示唆された。

2. 研究の動機、目的

2-1 研究の動機

1990年の出入国管理法の改定後、日本における定住外国人は増加の一途をたどっている。平成30年には新たな在留資格を創設されたことから、これまで以上に在留外国人の総数は増加すると考えられている。令和元年10月の法務省の報道発表資料によると約283万人の在留外国人が存在するが、「生活者としての外国人」に対する様々な分野からの支援は未だ後発的なものとなっており、特に在留外国人の日本語のリテラシー（読み書き能力）は非常に低いことが指摘されている

リテラシーは単純に「読み書き能力」とイメージされやすい側面がある一方で、命を守るための重要な能力であることはあまり知られていない。近年の大災害下では在留外国人の文字や文章を理解できないが故に二次災害に遭ったことは記憶に新しく、自然災害の多い日本においては特に日本語を母語としない人々へのリテラシー教育は喫緊の課題である。

精読	項目	多読
厳密に読む	授業目標	楽しく読む
翻訳する・設問に答える	学習目標	情報を読み取る
単語と文法	焦点	意味・内容
難解なものが多い	読書教材	易しい
教師	教材選択の主体	学生
少ない	読む種類	多種
少ない	読む量	多い
遅い	読む速さ	学生のスピード
最後まで	読む範囲	途中で止めてもよい
使用する	辞書の使用	使用しない
低い	読む自由度	高い

このようにリテラシーは重要な言語運用能力であることから日本語教育において、これまで数多くの研究が行われてきた。しかしながら、それら研究の中でも「多読」は、従来の「精読」教育法とはその目的を異にするだけでなく、比較的新しい教育方法であるため教材や実践例が少ない(表1)。

また、読書を教育ツールとしていながら読書教育の視点からの研究が少ないことも指摘できる。加えて、多読の研究の多くは学習者の内発的動機を読書の「楽しさ」においており、「読書は楽しいものである」という前提条件をもとに実践されていることが多く、母語であっても読書嫌いな学習者や読書習慣のない学習者に対する読書教育の視点からの多読実践の研究や、多読へ取り組むための内発的な動機を高める多様な読書活動の教材研究、または多読実践の長期的な有用性を検証する研究は未だ見られない。

多読は学習者に対してリテラシー向上を支援する有用な教育方法の一つである。故に、多読が読書という行為を伴う学習方法であるならば、読書教育及び読書活動の視点からの教育研究を行う必要があると考える。

2-2 研究方法

受講者に対する事前アンケートでは、24.1%の学生が母国では習慣的に読書に親しんでいなかったと答えているため、約4分の1の学生が母語においても読書を趣味として認識していないことが明らかとなっていた。また、来日後の読書経験についての設問には、全体の62.1%が母国にいたころと比べて本を読むことが少なくなったと回答しており、中でも、そもそも本に親しみのなかった学生は、より少なくなったと回答した。その理由としては「日本語の本は難しい」「忙しく時間がない」が最も多いことから、自己の日本語レベルとアクセスできる書籍のレベルが合っていなかったことが日本語読書へのつながりを阻害していたことが分かった。そこで、本研究では、まず、留学生の多読用教材として日本語レベル別のLLブックや、多読用図書、学習漫画、児童小説、まんが、小説等、学習者の興味関心に基づいてその書籍が選べるように教材を収集した。

また、学校図書館司書と連携を図り、図書館で授業をするだけでなく、図書館に「こども新聞」を取ることで身近な問題として、日本語で書かれた時事問題にも興味を持つように環境を整えた(図1)。さらに、本学はクラスルーム制度があるため、ホームルームが行われる教室の後方に学級文庫を作ること、図書館へ行かずともすぐに日本語書籍が手にできるようにした(図2)。



図1 多読演習の様子



図2 休憩時間の様子(学級文庫)

表2 日本語多読授業演習時間配分(分)

	読書活動なし	読書活動あり
読書	55	30
文法・語彙確認	15	10
発表原稿作り	8	8
紹介タイム	12	12
読書活動	-	25

後に、講義 90 分の学習時間分配を図示し、学生が何をするのかを明示したプリントを配布し理解を促した。次に、段階的に読書時間を延ばしていき、それぞれの段階で読後の感想や文法・語彙の調べ学習、調べたものに関する学習者のアウトプットの機会を設定した。

また、内発的な動機付けを促進させるために、お勧めの本を紹介するコメントカード作りや、読書郵便、帯作りなどの読書活動イベントを実施し、発表タスクを設けた。最終学期ではミニ・ビブリオバトルを行い、1年間の取り組みを振り返る読書活動を実施した。これらの作成物にかかれた日本語の量や質、また活動に対する質問紙調査で日本語学習者の内発的動機を高めたかどうかの調査を行った。

3. 研究の結果

ターム毎の受講者へ、読書記録を取らせて自らが読んだ記録を可視化したところ非常に満足度が高かった。また、4月や5月のアンケートでは多読演習の特性である「自分の興味に応じて読む本を自分で決める」という形態に慣れていないからか、授業での態度に戸惑いが見られたものの、1月の調査では授業形態に慣れたことから、多読演習へ積極性をもって参加したと答える学生が約70%となった。これは、回数と時間をかけて多読や読書活動をしたことによって、日本語の本を読む活動自体が自らの日本語リテラシー向上に繋がっており、役に立ったと実感した結果であると考えられることができる。さらに、学生たちは日本語教科書で学ぶ語彙と書籍にある語彙の違いにも気が付いており、明らかに書籍でのみ学ぶことができる語彙や表現があったと質的調査で述べている。残念ながら日本語の本を愉しむことができるようになった学生は少数であったものの、本学に在籍する留学生の日本語レベルが日本語検定試験ではN4からN3レベルであることを考慮すると「日本語の文章に慣れた」という点でも多読の試みは評価できると考えられる。

また、質問紙調査では「心に残った読書活動」を問うたところ、「紙芝居」「4コマ漫画」「ビブリオバトル」が多かった。紙芝居などは、図書館にある紙芝居をそれぞれが読んで実演してから「紙芝居を学ぶ」ところから始め、母国に伝わる童話を日本語で作成し、地域の小学校や高校の国際理解教育などで実演する一連の活動である(図4)。口頭調査では、「日本語独自の擬音語、擬態語が特に多く紙芝居では出るので、わか

さらに、毎朝、最初の日本語の講義では、開始後10分間は「朝の10分読書」時間とし、日本語教育に携わる教員全体で日本語による読書の推進に努める共通意識をもち、雰囲気作りも行った。

「日本語多読」においては、日本語学習における多読教育法の学習的意義を学生に説明した

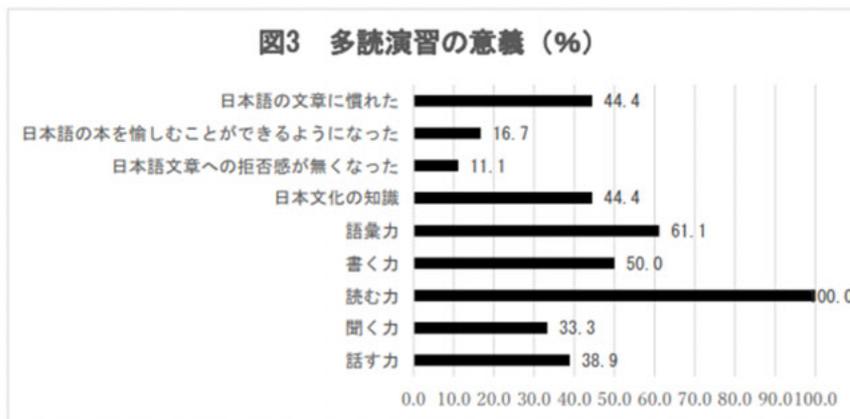
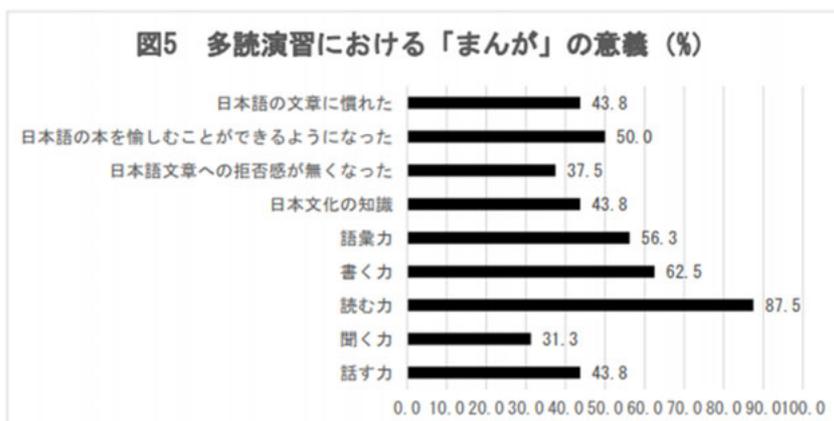


図4 学外活動の様子(国際理解教育)

りやすいし、興味が続いた（原文ママ）」という意見もあり、紙芝居ならではの教育効果も確認できた。また、教室内で培った日本語リテラシーを活用して学外の日本人と日本語で交流できたことが満足感に繋がっていることも明らかになった。

一方で、改善が必要な読書活動もあった。日本のソフトコンテンツであるアニメや漫画は海外でもファンが多く、日本語を勉強するきっかけとなる場合も多いため、内的動機付けを高めるために海外で人気の漫画を揃えた。しかしながら、海外で出版される漫画や書籍のページを



めくる方向やいわゆる「コマ」の読む順番が分からないという基礎的なものから、漫符と呼ばれる漫画特有の記号が読み取れない等の困り感が明らかとなった。前出の図3「多読演習の意義」が主に書籍に関する問いに対し、「まんが教材」に関する結果は図5である。漫画は絵が文章理解を助けるという利点がある分、学習者に負担感を軽減するだけでなく、本として愉しめる気持ちにさせることが分かる。このことから今後の多読実施時は、漫画の読み方を講義に加える改善が必要ながことが明らかとなった。

日本語多読演習を受講した学生たちは「多読」を学習するに値する授業であると捉え、積極的に参加した。基本的には自己のレベルに合わせた読書教材を読み進めることができることが学習者の心的負担を減らすことを可能としたと考察できる。また、多読授業開始時期には日本語で本読まない、ほとんど読まないと答えた学生が21.7%であったが、約1年後には多読授業以外の時間でも日本語で書かれた本を読むようになったと64.7%が回答していることから、学習者は、日本語多読の活動が自己の日本語リテラシーへ正の影響を与えていると自覚し、継続的な学習へ続く内的動機付けへと繋がったと考えられる。また、回答した学生の内、83%の学生は日本語の書籍は愉しめていないが、100%の学生がこれからも多読授業は必要であると考えていることから、必ずしも「楽しさ」だけで多読が可能となる訳ではないことが指摘できる。多読で得たリテラシー能力を、アウトプットすることのできる読書活動があってこそ、目的が明確になりその効果が可視化されることで学習者の満足感や動機付けを補完する働きがあったと考える。

4. 研究者としてのこれからの展望

本報告では、多読における読書活動が多読に臨む学生に対して、内的な動機付けを補完する役割を果たすことが示唆されたが、日本語リテラシーとしての根本的な「読みに対する正確さ」や「スピード」などは研究の対象外となったため、この点に関して研究を深めていきたい。今後はより読書教育と言語教育のつながりをより明らかにし、子どもから大人まで実現可能な教育方法の開発につなげていきたいと考える。

5. 社会に対するメッセージ

新型コロナが感染拡大している中で、留学生などの外国にルーツを持つ人々は非常に困難な状況に置かれてしまいました。ある種の被災ともいえる状況の下、これらの人々が命を守ることができるような日本語のリテラシー教育が必要であると考えています。今回のご支援により、学会や研修会へ参加できたことで多くの研究者からご意見や示唆をいただいただけでなく、言語を交えることの大切さを改めて実感しました。人間社会における言語がもつ社会的意義や価値は多様化しているものの、私はやはり、言語の価値を信じているからこそ、言語教育と共生社会の在り方に関して今後も研究の歩みを止めないよう進んでいきたいと思っております。心より感謝申し上げます。今後とも、ご支援の程よろしくお願いたします。